



センター長 大槻 剛巳
(衛生学教授)

副センター長 富田 正文
(医用中毒学准教授)

施設の概要及び特色

目的：本センターは環境生態領域の研究を円滑に遂行する為、関係設備及び機器を集中整備した施設である。

構成：本センターは次の構成で成り立っている。

1) 共同実験室 1～5

本センターの共同実験室は全てP1レベルの遺伝子細胞実験を行う事が出来る。各実験室は、実験台の単位でセンター登録者に割り当てられており、それぞれの実験を行っている。また、共同実験室4に於いては、センター所有の機器を集中的に配置している。

主な機器は以下のとおりである。

共同実験室1：マイクロ冷却遠心機、DNAオープン等

共同実験室2：ドラフト、冷却遠心機、低温恒温器、DNAオープン、恒温振盪培養機等

共同実験室3：クリーンベンチ、実体顕微鏡等

共同実験室4：細胞走化性解析装置EZ-TAXIScan、EZ-TAXIScan解析用PC、微量サンプル分光光度計NanoVue、バイオイメージングシステム(Chemi-Stage、Dolphin-Doc等)、バイオクリーンベンチ、CO₂インキュベータ、倒立型ルーチン顕微鏡(位相差セット)、低温恒温器、自動セルカウンター、プログラムテンプコントロールシステム、マイクロプレートリーダー、マイクロ冷却遠心機等

共同実験室5：安全キャビネット、極微量分光光度計等

2) 測定室 1～2

三眼システム顕微鏡、撮影装置付蛍光顕微鏡、

アキシオスコープ等

3) 洗浄室

純水/超純水製造システムMilli-Q Synthesis、蒸留水製造装置、卓上型凍結乾燥機、一体型DNA遠心濃縮システムSpeed Vac、オートクレーブ、恒温乾燥器、乾熱滅菌器、フレークアイスメーカー等

4) その他、検体保存スペース

超低温フリーザー、バイオメディカルフリーザー、フリーザー付薬用保冷庫、振盪培養器等

○自己評価と反省

平成21年度から、本センターでも私学助成研究設備補助によるEZ-TAXIScan簡易型細胞動態解析装置が導入され、多くの興味をもたれた研究者によって頻繁に利用されている。本センターは、基本的に「環境生態」に準拠した教室へのベンチの貸与と一部屋は共用機器の設置によって運営されている。現状でも若干、持込機器やセンターとしての共用機器が増加傾向にありその配置等で苦慮している部分もあるが、元来他のセンターと比して相対的にその面積も狭く利用者数も少ない中で、よい設備を今後も導入し利用者の利便を図りたい。反対に導入されてはいるが利用状況がそれほど頻繁でない機器もあり、こういった点の調整を配慮したい。

将来の改善方策

昨今の国内外での医学研究の状況と、制限された設備等の有効利用という観点からは、研究業績(論文、競争的資金の獲得、特許の取得等)を基準にその推進を図るという体制も否めないと考えてはいるが、学内体制としては、中央研究部運営委員会の所掌力を強化して全体の研究センターの管理をしていただき、現在のセンター管理体制の抜本的な改革がもたらされることも必要ではないかと考える。